

手のぬくもり

小林浩之

青森県・16歳・高校生

——あったかい。

君はいつも突然あらわれる。でもぼくは不思議と驚かない。昔のこと、ああそうか。あの時のボクはぼくじゃなかったから。

朝と夜とのくり返しという見えない迷路の中で、ボクは泣いていた。ひとりだった。何にも縛られたくない。自由でいたい。でも、誰かにこの思いを伝えたいと思い、絆を求めている。

矛盾イコール悪いこと、ずっとそう信じていた。いや、信じさせられていたのかもしれない。

真夏の夕暮れ、あの丘から見た景色を君は覚えているだろうか。そう、最初にふたりが出会った場所。君はずっと、公園で遊んでいる子供達を見ていた。嬉しそうに、

でも寂しそうでもあった。

そして、突然こう言った。

「一緒に消えませんか」

ボクは、

「一緒だったら、できる様な気がします」と言った。

悲しみや苦しみを、お互いもう感じなくなっていた。君はしばらく黙っていた。が、ゆっくりと口を開きつぶやいた。

「もう少しだけこうしていたい気がするんです。理由は、うまく言えません。あなたと一緒にすることは、死ぬことじゃなくて、何か別のことのような、まあそんな感じですよ」

「ええ、わかります」

ボクも同じ気持ちだった。

それからの生活は、本当に幸せだった。余計な言葉は必要なかった。生きる喜び、人を愛する喜びを感じながら、お互いに強くなっていた。

そんな中で一番覚えていたのは、君の手のぬくもりだった。やわらかくて、やさしくて、そしてなにより、あたたかかった。

ぼくは今日、東京へ向かう。

楽しい思い出も苦しい思い出も、引き連れて。